中古天台における始覚法門

桃尾幸順

はじめに

中古天台の本覚思想は中国天台と日本天台との違いを明らかにするだけではなく、後の時代の仏教諸宗派や日本文化に大きな影響を与えたとされている。そしてその本覚という言葉は『大乗起信論』において用いられたものを起源とすることもよく知られている。しかし中古天台における本覚は、『大乗起信論』における本覚とは明らかに違う意味をもっている。『大乗起信論』における本覚の如来蔵的な意味に加えて、中古天台では天台教学の不二一元論的な要素も付されているのである。当然のことながら『大乗起信論』において本覚と共に説かれている始覚という概念も、中古天台においては違う意味をもっていることになる。

本稿では、中古天台の文献において始覚という言葉の使用例を見て、中古天台における始覚法門の意義や役割を考察してゆきたい。そしてこの中古天台における始覚と『大乗起信論』における始覚を比較対照して中古天台思想を考察し、また文献による始覚の概念の相違を考察することによって、始覚の概念の幅や広がり、さらにはその反対概念である本覚法門についても言及してゆきたい。

一　『大乗起信論』における始覚

始覚と本覚の関係について、まず『大乗起信論』をみてみたいと思う。『大乗起信論』には次のように記述されている。

本覚義者。対始覚義説。以始覚者即同本覚。始覚義者。依本覚故而有不覚。依不覚故説有始覚。（大正蔵三二・五七六頁中）

ここでは、本覚の意味は始覚の意味に対して説かれるとしながら、始覚はすなわち本覚と同じであるとされている。また本覚があるが故に不覚があり、不覚があるが故に始覚があると説かれる。意味の上では本覚は始覚に対して説かれているものであるが、本来は同じものであり、根本の悟りとしての本覚が不覚という迷いに覆われることで、改めて始覚とい

印度學佛教學研究第五十四巻第二号　平成十八年三月

うものが必要とされる。本覚から不覚を経緯して始覚にいたることは、つまり本来あるべきものに帰るということになる。ここに説かれている本覚と始覚は対立概念というより、むしろ類似概念に近いものと思われる。

これに対して、中古天台における始覚はどのように意味付けされているかを次に見てゆきたい。

二　中古天台における始覚

最初に『修禅寺決』における始覚の意味を考えてみる。『修禅寺決』は伝教大師最澄作と伝承されるが、実際には鎌倉時代中期頃に成立したとされる文献であるが、その中から始覚という言葉が用いられている部分を三ヵ所ほど取り上げてみる。

まず『修禅寺決』四帖内一においての次の記述があげられる。

惣於一心三観有十四種不同、（中略）三証者実修三観、謂始覚門之時於分真即修実三観、本伝中証者所修一心三観即是也（日本思想体系九・三三四頁上下）

ここでは一心三観には十四種の不同があるとする中の第三として、証者実修三観をあげ、始覚門の時は分真即において、実の三観を修するとしている。だからここにおける始覚門の意味は凡から聖にいたる天台の段階的な修行法というものになるであろう。

次に同じ『修禅寺決』の四帖内三においての記述をあげてみる。

但今妙名依人浅深妙体作勝劣、始覚帯迷之輩以不反一理為妙九界迷心為麁故、妙義成偏意不称本法、然後捨今始情執帰本達実処之時、対迹本故成二見妙亦不成本性、上根上智輩直達妙実或値知識或従経巻（日本思想体系九・三四三頁下）

ここでは人には浅深があるので、妙体に勝劣があると説かれ、上根上智の輩が深であり、直ちに妙実に達するとされるのに対して、始覚帯迷の輩は浅であり、妙と麁を区別し、本迹を対立させるので、真実の意味での妙を理解することができないとしている。ここでの始覚は帯迷という言葉からもわかるように、本来の悟りに至っていないという意味合いで、劣った存在であるとされている。先にあげた『修禅寺決』四帖内一の引用文においては、特に始覚に対して、価値観は反映されていなかったが、ここでは劣るという価値が付与されているのである。

次にまた同じ『修禅寺決』の四帖内四における記述を見てみることにする。

通三身有用、法身化用者、法身如来住法性源空為自性十界説法利生、眼見色耳聞○皆是由法身説法花用、報身用者、住自行報土為内証十界説法、一切衆生随時依境心起慮○正由報身説法徳、諸

仏当体色心各別、互為依因彼対此々対彼、皆是本有応身内用也、於本有応身有証道八相、如此三身化用名本覚法用、始覚分別之時、由果海円満徳為機唱八相成道化儀、是名法用矣（日本思想体系九・三四七頁下）

ここでは三身の法用が本覚の立場からと始覚の立場からに分けて説かれている。本覚においては、眼に色を見、耳に声を聞くことなどがすなわち法身による説法の化用であり、時に随い境に依って心に慮を起こすことが報身説法の徳であり、色や心の諸法の当体は、お互いに依ったり、因になったりして、関係をもって存在しているが、このことが本来の応身の内用であるとしている。これに対して始覚の場合は、仏が衆生のために八相成道を示したことが、法用であるとしている。ここにおいての始覚は、独特の思想である本覚思想に対して、従来の仏教のありかたを示したものであるといえる。これも本覚を勝ったものであるのに対して、始覚は劣っているという価値が付随していると考えられる。

次に源信作と伝えられるが、鎌倉時代初期の成立とされる『本覚讃釈』の記述を見てみることにする。

問、一切凡夫無始自来未悟故亦不皆悟入、爾不可云本覚之身、答、対中間始覚指元初且云本覚歟、例如対中間有始論無始矣（日本思想体系九・三五一頁上）

ここでは一切の凡夫はいまだ悟っていないわけであるから、本覚の身とは言えないのではないか。という問に対して、中間の有始に対して無始を論じるように、中間の始覚に対して元初の本覚を指すのだと説明している。これは『大乗起信論』において、本覚によって不覚があり、不覚によって始覚があると説かれているのと、同じような意味で用いられているということができるだろう。

次に源信作とも、皇覚の作とも伝えられ、鎌倉初期の成立とされる『三十四箇事書』（別名『枕雙紙』）における記述を見てみることにする。

妙覚成道事

問、妙覚成道者、於何処唱耶、答、妙覚成道者、於理即一念心唱之也、其故理即体本自如来蔵也、如故即空蔵故即仮理故即中故也、平等法界本来常住不改云妙覚云寂光、故理即已上雖不同只是理即内徳無尽沙汰也、故善悪只理即一念体也、不知之日只如来自身外有之、知之日是一切自身也、非自身然他身亦爾、故平等法界体也云々、還同本覚云意也、妙覚成道於理即唱之、分証成道分真即等唱之、非究竟故、妙覚究竟平等故於理即唱、迷悟不二意是也、又還同本覚云事、能々可習之、名字位分論還同本覚也、其故本覚唯迷始覚唯覚、始覚本覚共知一還同本覚云也、雖然究竟還同妙覚也、能々可習之（日本思想体系九・三五九頁上）

ここでは妙覚成道について述べられている。妙覚成道は本来理としての仏が内在すると考える理即において唱えられて

いるものであり、その体としては、如来蔵があげられる。平等法界がそのまま悟りの世界であることが、妙覚であり寂光であるとする。だから善も悪もそのまま仏となりうる。このことを知らない間は、如来は自分自身の外に存在するが、このことを知れば、如来を含めた一切が自分自身と同化する。またこれは自分だけのことではなく、すべての存在にも同じ事が言える。だから平等法界の本体であり、本覚に帰一するという意味なのである。また分証成道は分真即において唱えられるもので究竟のものではないが、妙覚成道は究竟平等であるから理即においてこれを唱えるとしている。迷悟不二というのはここでいえるのであり、還同本覚というのもそうである。名字即の位から見れば、還同本覚を分けて論ずることができるが、そうすると本覚はただ迷であり、始覚はただ覚であるといえる。しかし究竟の妙覚は還同本覚であり、還同本覚から見れば、始覚と本覚は一つのものであるといえるのである。

ここでの始覚は究極的には本覚と同一化するとされるものである。天台教学では対立概念を同一化する方向性に価値を置くので、始覚と本覚を不二平等と見るのは、当然の帰結であるといえるが、始覚即ち本覚というのは、既に『大乗起信論』において唱えられていることでもある。

次に忠尋作と伝えられるが、鎌倉中期頃の成立とされる『漢光類聚』の四巻の一節を見てみる。

問、仏起三毒耶、答云云、若起三毒云者仏無上覚者也、智徳断徳円満、失有之、若依之然也云者、今釈、衆生即是仏云其衆生起三毒様釈成、仏起三毒見如何、答、仏三毒起不起倶不可有相違、此事浄名経分明也、仏有二義也、一始覚断迷仏不可起三毒、二本覚実仏衆生当体本有仏果也、此仏縦起三毒不可有相違、蘇悉地経釈迦為浅仏提婆為極仏此意也、慈覚大師受此文、浅略門時釈迦為善人提婆為逆人、深秘門時釈迦提婆倶一如也、秘中深秘門時釈迦断相修顕仏故為浅提婆不転本極妙体故為深、秘秘中深秘門時非釈迦非提婆本極無相真意為法大宗釈、今文如是可得心（日本思想体系九・三九七頁上下）

ここでは智徳と断徳を円満している仏が、三毒を起こすのはおかしいのではないかという問いに対して、仏には二義あって、一は三毒を起こさない始覚断迷の仏で、二は衆生の当体本有の仏果である本覚の実仏であるとし、この本覚の実仏が三毒を起こすことは間違いではないとしている。また『蘇悉地経』で釈迦を浅仏とし、提婆を深仏としているもこれと同じ事であり、慈覚大師円仁はこの文を受けて、「浅略門の時には釈迦が善人で提婆を逆人とするが、深秘門の時には釈迦と提婆はともに一如であり、秘中深秘門の時には釈迦は断相修顕の仏であるが故に浅であり、提婆は不転本極の妙体であるが故に深であるとしている。そして秘秘中深秘門の時には

釈迦にもあらず提婆にもあらず、本極無相の真意を法の大宗となす。」と釈したとされる。

ここでの始覚は本覚の深に対して浅とされており、やはり本覚より劣ったものとして意味付けがなされていると考えられる。しかしながら円仁の釈とされる文の中には、始覚と本覚を等価値としている部分もあるので、始覚即ち本覚という意味付けであるともいえる。

むすび

以上の例を考察すると、始覚という言葉にはおよそ三種類の使われ方があることがわかる。一つは漸教的な仏教の修行法に対して使われるが特に価値判断を含まない場合であり、二つ目は同じような使われ方ではあるが、本覚と反対概念として用いられ、本覚よりも劣ったものという価値判断が付随している場合、そして三つ目はその価値判断が同等であるかあるいは始覚即ち本覚という場合である。

いずれの場合も『大乗起信論』で定義された意味と関わりがあるといえるが、それぞれに付与された価値の違いは、本覚思想における始覚の意義の変遷やその多様性を示すものであると考えられるのである。

〈キーワード〉 中古天台、始覚、本覚

（四天王寺国際仏教大学講師）

126. The *Shikaku* (始覺) Idea in Medieval Tendai Doctrine

Kōjun MOMOO

This paper concerns the *hongaku* idea of medieval Japanese Tendai. A main problem is the meaning in which the word *shikaku* is being used. I first consider the meaning of the term in the *Dacheng qixin lun*. Then, I examine its use in a number of texts associated with *hongaku* thought. I conclude that the term is used in a variety of senses.

127. A Consideration of the Missing Section of Genshin's *Bodaishin-gi-yōmon*: Based on the Insei era manuscript owned by Kōsan-ji

Masazumi KOYAMA

For a long time, Genshin's *Bodaishin-gi-yōmon* 菩提心義要文 was thought to be no longer extant. However, in 1968, Satō Tetsuei 佐藤哲英 discovered a manuscript and introduced it to academic circles. This manuscript is thought to be from the end of the Heian era or the Kamakura era. However, because this manuscript lacked its beginning, the complete contents could not be known. In examining whether or not another copy of the *Bodaishin-gi-yōmon* existed someplace else, I learned that there was a copy in Kōsan-ji 高山寺. This research considers the missing section based on the manuscript owned by Kōsan-ji.

128. A Study of the Chinese Chan Master Nanyue Huairang (677-744)

Yoshiki MATSUBARA

There are three well known accounts of the Chinese Zen Master Nanyue Huairang (Jp. Nangaku Ejō): 1) he is the Dharma heir of the sixth Chinese patriarch Huineng; 2) he is considered by later generations to be an important figure as the teacher of monk Mazu Daoyi (Jp. Baso Dōitsu; 707-788); 3) according to the historical account *Baolin zhuan* (Jp. *Hōrin-den*; 801), he achieved his enlightenment under the instruction of the Master Laoan (Jp.